2022年の事故概要から見えた状況

石川昌／遭難対策部　部長

前年度と比較して、次の３点が大きく変化した。

事故者の増加

コロナ禍によって事故が減少した前年度269名と比較し、334名（表-1）と大きく事故者数が増加した。死亡事故も前年４名から７名（図-2）となり、増加した。2003年の最多数345名に続く過去２番目の発生となり、過去10年間では最多（図-1）となった。主な要因は、２年間続いたコロナ禍の中で控えていた登山活動を再開した会員が増加し、同時に登山回数も増加したことが事故の増加に直接繋がった。特徴的な傾向は、都市部郊外での事故が多発した事。これは、身近な郊外の低山に登る傾向が登山団体に限らず社会的な流れの中で強まったことに因る。2021年からこの傾向は大きくなり、2022年でも同様の状況だったが、徐々に北アルプスを含めた3000m級の登山活動も復活し始めている。

事故者の高齢化

年齢構成は、2022年に75歳以上の事故者が39名(図-3)と、ここ５年間の状況を超えている。年代別の最多数はしばらく65～69歳で推移してきたが、2022年は70～75歳に移行している。登山団塊の世代、昭和15年～昭和30年（1940-1955年）生まれの年齢幅が移行している事を示している。

女性の事故者の増加

５年間男女の差は殆んど無かったが（表-3)、2022年は女性の事故者が大幅に増加した（図-4)。現時点では2022年の男女別登山者数実態を掴めていないが、各山岳会から寄贈された会報から推定して女性会員の登山者数が男性を超えている事も要因の一つと考えられる。だが、更に分析が必要だと考えている。

表-1　2003年の345名に次ぐ過去２番目の事故者数。2004年から2021年の18年間で事故者数は最多。

年	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
事故者数	307	316	288	299	312	313	329	236	269	334
死亡行方不明	14	10	12	8	6	10	4	5	4	7

図-1

図-2

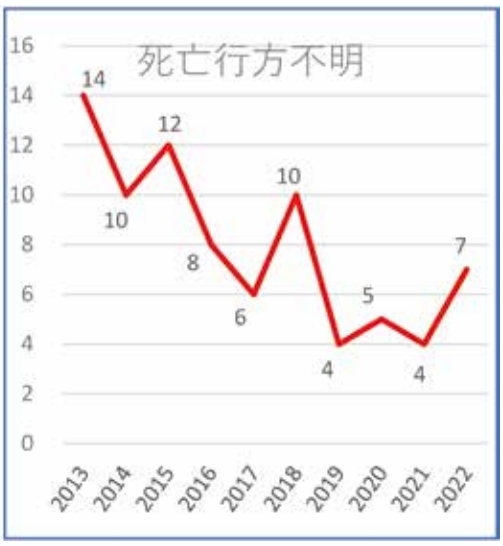


図 -3　年齢構成

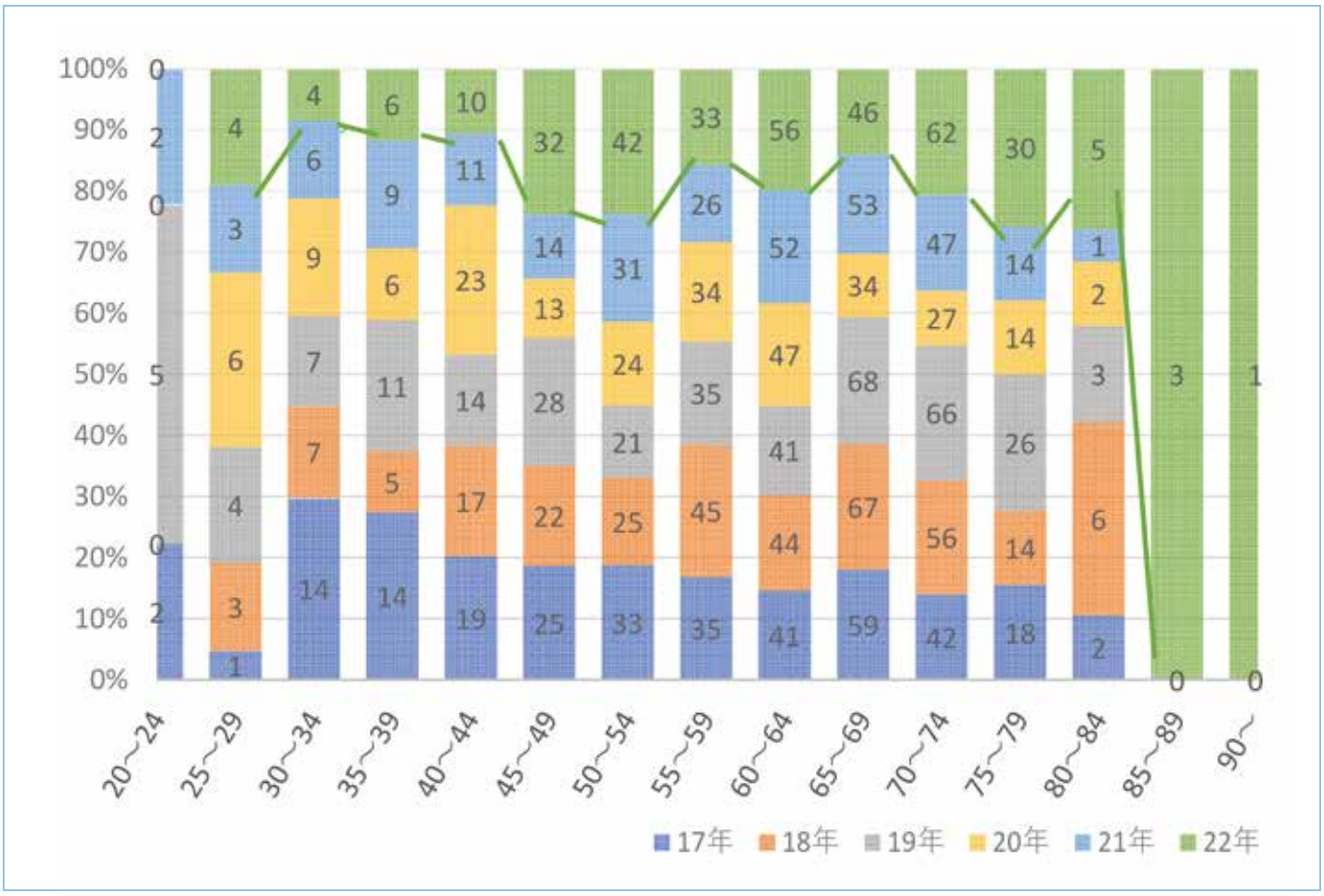


表 -2

	17年	18年	19年	20年	21年	22年
20~24	2	0	5	0	2	0
25~29	1	3	4	6	3	4
30~34	14	7	7	9	6	4
35~39	14	5	11	6	9	6
40~44	19	17	14	23	11	10
45~49	25	22	28	13	14	32
50~54	33	25	21	24	31	42
55~59	35	45	35	34	26	33
60~64	41	44	41	47	52	56
65~69	59	67	68	34	53	46
70~74	42	56	66	27	47	62
75~79	18	14	26	14	14	30
80~84	2	6	3	2	1	5
85~89	0	0	0	0	0	3
90~	0	0	0	0	0	1

表 -3

	男性	女性	合計
17年	158	154	312
18年	153	160	313
19年	168	161	329
20年	124	115	239
21年	133	136	269
22年	151	183	334

図 -4　男女差

更に、特徴的な変化があった

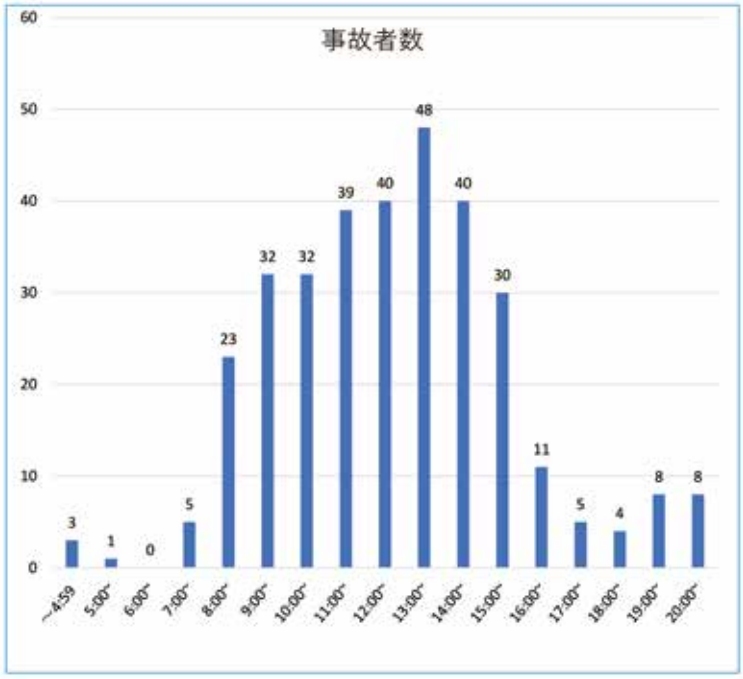
時間帯

事故発生の時間帯が変化した。以前は、12時を挟んで11時と13時の二つのピークがあったが、2022年は13時台（図-5）に事故のピークが集中した。

2017年・2018年は12時に事故者が減少、2019年は11時が、2020年・2021年共に12時が減少していた状況だった。昼食の関係で12時の時間帯が行動しない事が要因と思われるが、2022年は13時の時間帯が最大となった。昼食後の下山時に多くの事故が発生していると考えられる。

図-5

時間帯	事故者数
～4:59	3
5:00～	1
6:00～	0
7:00～	5
8:00～	23
9:00～	32
10:00～	32
11:00～	39
12:00～	40
13:00～	48
14:00～	40
15:00～	30
16:00～	11
17:00～	5
18:00～	4
19:00～	8
20:00～	8
未記入	5
人数	334



登山形態

登山形態では無雪期事故が急増し、積雪期が減少した。沢登りや登攀も減少の傾向である（表-4）。

都市郊外の日帰り山行が増加したことも要因の一つである。

図-6

山行状態	事故者数
無雪期登山	193
積雪期登山	23
登攀	34
冬季登攀	4
沢登り	31
山スキー	16
訓練	9
人工壁	14
氷瀑	4
スノーボード	2
海外登山	4
未記入	0
合計	334

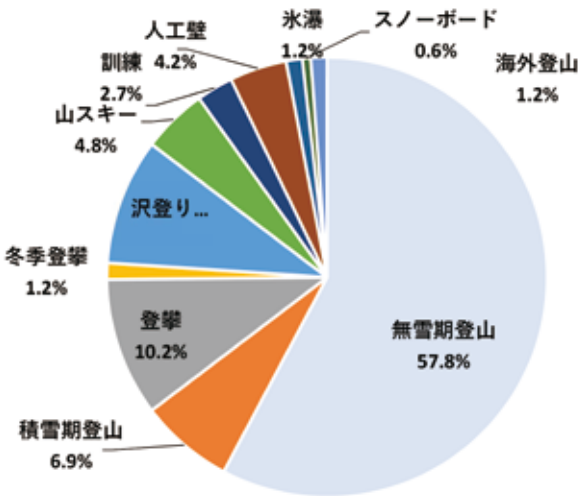


表-4

	事故者数					
山行状態	2017	2018	2019	2020	2021	2022
無雪期登山	131	149	168	104	140	**193**
積雪期登山	35	41	22	19	15	23
登攀	52	33	46	40	45	**34**
冬季登攀	1	5	6	4	1	4
沢登り	42	50	32	34	27	31
山スキー	11	12	17	16	18	16
訓練	13	3	5	6	3	9
人工壁	12	11	9	10	15	14
氷瀑	6	5	8	1	3	4
スノーボード	0	0	0	0	0	2
海外登山	5	3	10	0	2	4
クロカン・スノーシュー	2	0	2	1	0	0
その他	2	2	4	4	0	0
合計	**312**	**314**	**329**	**239**	**269**	**334**

事故原因

事故の原因として、転倒事故が増加した。（表-5）これは体勢を転倒に含めた為である。体勢とは、転びそうになって手を突いたり・足を捻ったりと最終的には転倒しなかったが転倒同様バランスを崩したり体勢を崩した事による。

転・滑落事故は、80台の数字に留まっていて大きな変化はない。雪崩・道迷い下山遅れに関しては、この数年事故は発生していない。

図 -7

原因名	事故者数	男	女
転倒	160	57	103
転・滑落	81	44	37
体勢	31	11	20
虫・動植物	13	7	6
落石(落氷)	7	5	2
凍傷	7	7	0
病気	4	3	1
高度障害	4	2	2
熱中症	2	2	0
低体温症	1	0	1
その他	24	13	11
合計	334	151	183

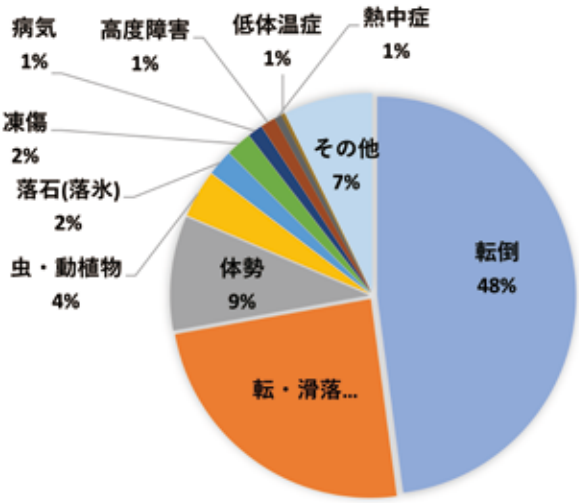


表 -5　※その他は、下山後に痛みが出た事例、特定の原因が不明な事例、熱中症や低体温症も含まれている。

	転倒(体勢含む)	転・滑落(墜落含む)	落石	虫・動植物	高度障害	雪崩	病気	道迷い	凍傷	火傷	荒天	下山遅れ	その他	合計
17年	126	98	14	12	4	4	9	2	2	1	0	0	40	312
18年	143	83	8	9	3	1	3	2	6	2	1	2	51	314
19年	151	87	10	20	6	1	4	2	6	1	2	5	34	329
20年	100	85	3	10	0	0	1	0	4	1	1	0	34	239
21年	147	82	9	14	0	0	1	0	7	0	0	0	9	269
22年	191	81	7	13	4	0	4	0	7	0	0	0	27	334

男女差

転倒事故の男女差については、2018 年から 2021 年まで 20 - 30 名前後女性が多い傾向が続いていたが、2022 年は 55 名の差があった。

表 -6　転倒による男女差

	転倒	男性	女性
18年	**143**	56	87
19年	**151**	61	90
20年	**100**	38	62
21年	**147**	66	81
22年	**191**	68	123

下山時の事故

下山時の事故について、2022 年事故 334 名中、下山時の事故は 171 名（51%）。

事故の半数は、下山中に発生している。そのうち転倒（体勢含む）130 人約 8 割り近くの方が下山中の転倒事故である。

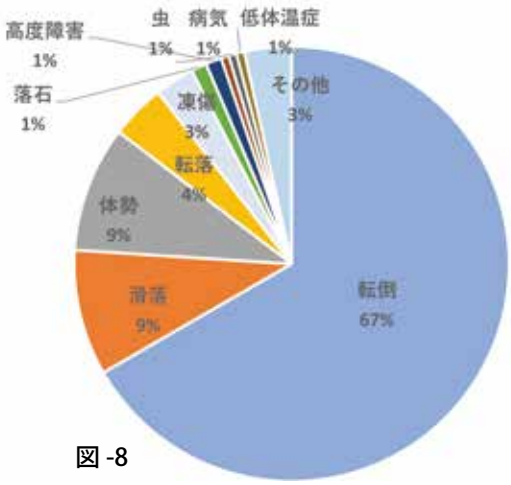


図 -8

表 -7

原因名	事故者数	男	女
転倒	114	41	73
滑落	16	7	9
体勢	16	6	10
転落	7	3	4
凍傷	5	5	0
落石	2	1	1
高度障害	2	0	2
病気	1	1	0
虫	1	0	1
低体温症	1	0	1
その他	6	3	3
	171	67	104

山に登山者が戻ってきた事が、事故の増加に繋がっている。さらに、高齢の登山者が下山中に起こす転倒（体勢）が多くを占めている。下山時の転倒防止が事故者数を減らす大きな課題である。体力不足により起こるケースが多いことから、山筋ゴーゴー体操をはじめとする筋力トレーニングを積極的に取り入れ、脚筋力やバランス能力、反射機能を高める努力も必要がある。